

## C-20 若年女性にみられた胸膜中皮腫の1剖検例

日大第1内科

○浴村正治, 森脇紀夫, 藤原義剛, 岩永隆行,  
内村 実, 勝呂 長, 内山照雄, 岡安大仁,  
萩原忠文

われわれは、若年者・女性で短期間のうちに胸腔内巨大腫瘍を形成し、組織学的に診断が極めて困難であった胸膜中皮腫の1剖検例を経験したので報告する。

症例：20才，女性，会社員。主訴：呼吸困難および右胸痛。既往歴：家族歴共に特記すべき事項なし。現病歴：昭和49年1月より，労作時呼吸困難，右胸痛を自覚し，某院に浸出性肋膜炎の疑いで入院した。胸水は初回血性，その後黄褐色に変化し，一次抗結核剤とPredonisolonの投与を行ったが，胸部レ線像は好転せず，3月19日当科に入院した。

現症：脈拍140/min整，呼吸数30回/分，眼結膜に黄疸，貧血なし，右胸部は濁音を呈し，呼吸音を聴取しない。心音清，右上腹部に圧痛があり，表面平滑で軟い肝を5横指触知する。腹部表在静脈怒張があり，下肢に浮腫をみとめた。検査所見：白血球数18,700，血液像に幼若球（1%）をみとめ，赤沈1時間58mm，CRP4+，LDH500u，ChE0.3，総蛋白4.5g/dl，Alb,46.3%， $\gamma$ -gl16.7%， $\alpha_1$ -フエトブロテイン(-)，喀痰中の結核菌塗抹培養(-)，その他，肝機能，電解質，腎機能，尿所見などに異常はみとめず，胸部レ線像では，右全肺野は均等性陰影で覆われ，心は左に偏位していた。胸水は，黄褐色で，結核菌(-)，LDH2000u/6以上で，細胞診ではClassII，胸膜生検でも悪性像はみとめられなかった。経過：3月27日に試験開胸を行ったところ，開胸下に表面凹凸で，易出血性の腫瘍をみとめ，胸膜面にも，米粒大の結節を多数みとめた。病理所見では胸膜中皮腫，肉腫などが考えられたが，電頭像で悪性胸膜中皮腫と診断された。3月30日よりVEMP療法，4月10日より $Co^{60}$ を肺門部に隔日照射を施行した。一時腹壁静脈怒張と下肢の浮腫は軽快したが，胸部レ線上に改善はみられず，5月11日に死亡した。

剖検所見：右胸腔内は直径40cmもの巨大腫瘍によって占められ，心臓，肺野は共に左方に，肝臓は下方に著るしく圧排され，下大静脈にも腫瘍による狭窄があった。右肺は極度に萎縮々小していたが，肺実質に腫瘍はみとめられなかった。転移は臍頭部，右腎，副腎および腹膜にみとめられた。

断案：20才の女性にみられた胸膜に発生した悪性中皮腫の1剖検例を報告した。

## C-21 7年以上の長期にわたり興味ある経過をとった胸膜悪性中皮腫の一例

長崎大学 才2内科

○奥野一裕, 雨森博政, 中塚重和, 手田恒敏,  
吉村 康, 中野正心, 原 耕平,

長崎大学 才1外科

富田正雄

長崎大学 中検病理

中山 厳, 松尾 武

症例：21才女，主訴：血痰，全身倦怠感。既往歴：家族歴：特記すべき事なし。現病歴：13才の時検診にて胸部X線上初めて異常陰影を発見され，その後も検診の度に異常を指摘されたが，自覚症全くないため放置。20才の時職場検診にて胸部異常陰影の精査を勧められて某医に入院。肺結核として治療を受けていたが異常陰影は増大の傾向を示し，血痰，全身倦怠感出現してきたため，長大才2内科に紹介入院された。入院時現症：体格中等，栄養良，左下肺打診上短で呼吸音の減弱を認める以外特記すべき事なし。検査所見：尿，便，末梢血，骨髓，生化学検査著変なし，ツ反応強陽性，血沈軽度亢進，喀痰結核菌陰性，細胞診陰性。肺機能では軽度の拘束性障害を認めた。入院時胸部X線では，7年前に見られた左下肺の陰影は著明に増大して塊状影となり，左肺尖部，大動脈弓部及び左上肺外側縁から肺内に向う境界鮮明な腫瘍陰影が多数認められた。気管支造影では腫瘍による圧排所見が見られた。血管造影では下行大動脈は右方への軽度圧排と一部に壁不整像を示し，腫瘍は主に肋間動脈，一部気管支動脈より栄養されていた。腫瘍の経皮的吸引生検にて，比較的均一な上皮性を思わせる腫瘍細胞が多数認められたが，組織型を確定することは出来なかった。

以上より，縦隔側胸膜に原発し，左胸膜に転移した悪性中皮腫を疑い，外科にて左胸膜・肺切除術を行った。肉眼的に左下肺の主腫瘍は分葉状で血管に富む被膜を有し，左下葉及び下行大動脈，横隔膜の一部と密に癒着していた。臓側胸膜には大豆大までの，壁側胸膜には被膜を有した有茎性の大小の腫瘍が多数認められた。剖面は分葉状，淡黄色調でムチン様光沢を有していた。組織学的には，類上皮性細胞が乳頭状構造を示しながら増殖した部と，間質の間に紡錘形細胞が一見線維肉腫の如き配列増殖を示す部とが混在して認められ，混合型の中皮腫と診断した。

胸膜中皮腫はビマン性と限局性とに分類される。前者は悪性度が高く，胸膜にそって急速に發育浸潤し，血性胸水貯溜例が多い。後者は良性和悪性とに分けられ，發育は比較的遅く，胸水貯溜例は少いとされている。本症例はX線の経過及び手術所見から，限局性中皮腫として始まり，その経過中に明らかな転移を来していることから悪性と考えられた。